エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２１９号

2020 年 7 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三
電話　080-1232－0905

http://agape.wjg.jp/encounter

佐生健光『キリスト教と称名』より（4)

聖霊について

聖霊に満たされるとは、…日常性から離れた異常な魂の躍動がもたらされることではないか、私は長い間それを期待し、そのようなことの訪れを待ちあぐんでいた。何故なら、聖霊に満たされることによって、私は救いの確信を得ることができるであろうと思ったからである。ところが、何時まで待っても、その訪れはなく、空しく時は過ぎていった。

あるとき小西先生の「聖霊は徐々に降る」というお言葉を思い出した。この言葉の由来は内村先生にあるということだが、小西先生もしばしばこう言われたのである。それは私の間違った、過大な期待をただしてくれた。

自分の精神的高揚をもって、救いの核心を得ようとするのは間違

いである。聖霊が突如に降る人もあろうが、私の場合は、徐々に降ったのである。

私たちが、2000 年以上も前の書籍に神の言葉を見出そうとするとき、同士が集まって神の言葉を聴こうとするとき、とりわけ、主のみ名を称えようとするとき、徐々に降り給う聖霊の働きがあるのだ、ということがやっと分かったのである。べたっとこの世にへばり付いている我々は、聖霊によらなければ、そんなことをしようとする心になることすらないであろう。先生はしばしば、言われた「救いというものは、神の知恵に基づくものであり、人間の感情に基づくものではない」と。このことも真の意味が同時に、はじめて分かったように思うのである。

私は先生から言い知れぬ程の恩恵を受けた。それは以上の通りである。先生は、「御利益のない宗教は駄目です」と、言われた。

私は、莫大な真の御利益を先生の導きで、我らの主イエス・キリストから受けたのである。

一本槍で行け

小西先生が伝道の中心にされたのは、人間の救いということであった。企業の役員クラスの人が、一転して伝道師になる、というのは、なまやさしいことではない。相当の覚悟がおありであったに違いない。経済的に見ても、それは大変なことで、ある人が「先生のお宅を見回すと、『赤貧洗うがごとし』であった」と言われたが、それは必ずしも、オーバーな表現ではなかった。先生は、捨て身で「恵心流キリスト教」を述べ伝えられたのである。

先生の説教は、聖書講解に徹し、しかも、ロマ書を中心としたパウロ書簡に集中された。…「人間は本当に成し遂げようとすることがあったら、一本槍でなければできない。力が二つ三つと分かれていたのでは、インポッシブルじゃそんなものは――」と、言われたことを思い出す。先生の御生活はその一本にしぼられていたのである。

真理の御霊

キリスト教を理解するただ一つの方法、つまり、救われるただ一つの方法は、自分に真理の御霊をいただく以外にはないのである。…

パウロは次のように言っている。

> 我は8日めに割礼を受けたる者にして、イスラエルの血統ベニヤミンの族、ヘブル人より出たるヘブル人なり。律法に就きてはパリサイ人、熱心につきては教会を迫害したるもの、律法によれる義につきては責むべき所なかりし者なり。されど、ここに我が益たりしことは、キリストのために損と思ふに至れり。
>
> 然り、我らは主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために既に凡ての物を損せしが、これを塵芥のごとく思う。（ピリピ書　3・5－8）

幼児のように

　イエスが言われた通り、自分が持っているすべてのものを捨て、一人の幼児のようになって聖霊を受けなければならない。これが必須の条件である。パウロはそれができた人である。彼は「わが如くなれ」と言ったが、我々にはそれができるだろうか。私は今、幼児になれるだろうか。

「インポッシブルじゃ、そんなものは――」と、小西先生が言われたのが、私の耳の底に残っている。私は、べったりとこの世にしがみついていて、自分はこの世から離れたいと思っていても、自分の身がそうはさせない。そんな自分を「相当なものだ」と思う自分を発見する。いまさら幼児に戻ることは不可能だ。

　ああ、悩める人いなるかな！である。

　幸いなことに、このような者にも、神は救いの御手を伸べてくださったのである。それが、小西先生に教えていただいた「主の御名を称える称名の業」である。

　このことは、私にとって救いの最後の手段であり、この他に救いはないのである。

小西先生から教えられたこと

　私が小西先生に初めてお目にかかったのが、昭和 27 年 1 月であった。以来ご昇天になられた昭和 55 年 4 月まで、28 年余の間、そして今なお引き続き、先生の福音についてお教えいただきつつある。昨年、先生から教えられたことで私の心の奥に刻み込まれたことを、特に「称名」に関わりあることを、今のうちに自分のために、メモとして書き留めておきたいと思い立ち、筆を取った。

　ところが、書いているうちに、ページ数が増えていった。と、同時に、先生の弟子の末席に座すものが、先生の福音をこのように受け止めたという記録として、こんなものを世の中に残してもよいのではないかと思うようになった。

また、「救われたい」と願う人がおられれば、このような記録が何かの参考になるかもしれない。そうなれば望外の幸せと思うようになったのである。…

歎異抄のことば

たとひ法然上人にすかされまひらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念仏して地獄にも落ちてさふらははばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず、佛説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したまふからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。

歎異抄（浄土真宗聖典より）

謙遜について

…私は大阪の香里教会で洗礼を受けたが、牧師の大里先生は小西先生をご存じであった。大里先生が神学校を卒業され、はじめて牧師として立たれるとき、小西先生から贈られたはなむけの言葉を教えてくださった。

「大里君、伝道師に必要なことは、、まず第一に謙遜じゃよ！」と、大事なことを言われるときよくなさった、しかめ面のような面持ちで、そうおっしゃられたとのことである。

先生は、「威張る人がいたら、威張るということだけで二流以下の人物と思ったらよろしい。人間には威張る理由はなに一つないのだから、一流の人はみな謙遜です」と、言われ、先生が尊敬された金沢常雄先生を引き合いに出され、「学校の小使いさんのような方だった。『教えたろかー』などという態度は全くおありにならなかった」と、謙遜の重要さを説かれたことがあった。「コリント前書には、愛について力説している場所があるが、パウロはその前に謙遜について説いていることを忘れてはならない」と、先生は言われた。

この世の知恵・神の知恵

　この世の知恵は、神の前には愚かなるにもかかわらず、逆にこの世の知恵は神の知恵が愚かに見える。だから、我々はこの世ではむしろ愚かになろうとすべきであろう。思うに、謙遜とは、自分が罪人であることを本当に自覚した者から、自ずと現れ出る姿勢ではあるまいか。罪ある者が、他の人に向かって威張るということはありえないからである。

　先生は常に、自分の目の前にある、今なすべきことを全力をあげてせよ、と言われた。目の前になすべきことを離れて、社会のために、世界平和のために力を尽くせと、強調されることはなかった。社会に偉大な貢献をして称賛された人の業績を、「大したことないよー。」と言われたことすらあったのである。

持ち場を守ればよい

大林組に入社し、しばらくして福井の現場に長期の出張をした時のこと。私は、現場の近くにあった教会の礼拝に出席するようになっていた。週一回の夜の集会では、出席者が信仰について語り合うことになっていた。或るとき、元気な中年の男性が年老いた母親と一緒に出席しておられたが、その男性が次のような発言をされた。

「最近の日本の社会的荒廃は、クリスチャンとして見るにしのびない。我々は一致団結して日本をこの荒廃から救い、理想の国をつくるため運動を起こそうではないか」と。しばらくして、この人のお母さんが言われた。

「私は、クリスチャンが徒党を組んで、そんな運動を起こす必要はないと考える。私たちは、自分の持ち場を一生懸命に守ればそれでよいのであり、あとは神様にお任せすればよい。私たちは社会をよくする前に、じぶんが天国に行くことを真剣に考えるべきである。私は召されたら、このままの状態で自分が天国に移されて、永遠の命をいただいて生きていくのだと思っている。そこが私にとっての理想の国だと思う」と。後になって、このことを小西先生にお話ししたところ、うれしそうなお顔で、「息子は、お母さんにやられたな」と言われた。

小西先生の涙

ある時、某教会から二人の兄弟の訪問を受けたことがあった。主旨は「この闇の世にあって、社会の浄化のため、クリスチャンたるもの一致団結して戦おうではないか」と、各教会を説得に回っているというものであった。礼拝が終わったあとで、来られた兄弟を囲んで、私たちは話を聞いた。彼らは上記の趣旨を熱心に説かれ、自らをクリスチャン軍団のキャラバン隊尖兵と称しておられた。

一通りの話が終わったところで、高円寺東教会のある兄弟が次のような主旨の発言をされた。「私たちは毎日、主のかかりたもうた十字架の上に自分の罪が滅ぼされたことを感謝しつつ、目の前におかれたなすべきことを全力で成すことを心がけている。それ以外のことは教会としては、必ずしもなすべきことではないと思う」と。

その時、同席しておられた小西先生が、はらはらとあふれる涙を押さえておられるのに気が付いた。私の記憶では、先生が人前で涙を流されたのは、後にも先にもこの時だけであった。……

しかしその後、私はこの時のことについて、時折思いを巡らせることとなった。…その席での一兄弟の発言に対し、よくぞ言ってくれたといううれしさであった…のではないかと思っている。